

<前回> 17世紀イギリスの思想状況

(1) イギリス宗教改革

2. 混乱の世紀17世紀 → 近代へ

- ・ヘンリ8世の宗教改革以降：イギリス国教会、カトリック、ピューリタン
- ・ピューリタン革命、王政復古、名誉革命
- ・封建制、新興ブルジョワジーと市場経済、伝統的な価値観・倫理観の混乱
(どん欲で金権主義的なブルジョワジー)

3. イギリスの宗教改革の特徴とピューリタン

- ・上からの宗教改革、中道あるいは中途半端
- ・ピューリタン諸派：長老派、独立派、第五王国派
独立派・分離派(長老派に対して信仰の自由を要求)
平等派(成年男子の普通選挙権の要求)

4. ヘンリ8世(イングランド教会の地上における唯一の最高の首長) → エドワード6世(共通祈祷書) → メアリの反動改革(53~58)

→ エリザベス：国教会の確立(教義面・プロテスタント的+教会制度・カトリック的)
= middle way or halfway? Via Media

- ・ピューリタン(pure church)とりしまり法→チャームズ(25~49)：独裁制*ロード体制
→ピューリタン革命(1642~49)：議会の分裂(王党派と議会派・トルミーの反主教同盟). 独立派の権力掌握→ジェームズ1世の処刑(49)→クロムウェル(~58)・共和制(49~60)→チャールズ2世(1660/5~)と王政復古：

クラレンドン法典(1661/自治体法、62/礼拝統一法、63/秘密集會法、64/5マイル法)、
審査法(1673)

→名誉革命(1688)→89/宗教寛容法

6. 広教主義：イギリス国教会の自由主義者・合理主義者・寛容論者(中道路線)

同様の思想は、ピューリタンにおいても、一定の範囲で共有されている。

7. 宗教的寛容と政教分離へ。近代の議会民主主義とピューリタン：リンゼイ

(2) リンゼイ・テーゼ

2. リンゼイ(Alexander Dunlop Lindsay, 1879~1952)・テーゼ：

「ピューリタニズム→イギリス・デモクラシー」

4. パトニー討論(1647/10/28-11/1)：近代民主主義の母体としてのピューリタン教会会議。
・ニュー・モデル軍の総司令部が置かれていたロンドン南西部のパトニーという小さな町で開催された軍総評議会での、1647年10月28、29日、11月1日の討論の総称。

6. レヴェラーズ(平等派)ーレインバラ大佐

1645年頃。「生得権」ないし「自然権」。自然法に基づく自己保存と抵抗権の主張。

『人民協約』(An Agreement of the People, 1647年11月3日)

7. ピューリタンの軍会議

(1)同意の原理：神の前の平等 → 人権 → 普通選挙権

(2)討論の原理：いかにして「神の意志」を発見するのか

意見の不一致、多様な意見の存在と、相互批判の容認(代議制・公認された
反対政党の存在を承認) → 民主的で自由な討論 → 合意 → 神の意志

神の意志の発見に関する寄与、相補性

(3)集いの精神(the sense of the meeting)：神によって集められた契約共同体

5. 宗教改革の万人祭司・キリスト教の集いの経験 → 民主主義の基盤

ルターの万人祭司論 → 平等な人権 → 同意に基づく政治 = 民主主義 → 普通選挙権

「神の前」において ↔ 現実

6. 自由な討論を保証するシステム → 政教分離の原則、市民社会の宗教の原則

5. 理神論と千年王国論

(1) 啓蒙的近代とその意義

5. 近代とは：社会システム変動が現実性全般に及ぶプロセス

キリスト教の普遍性あるいは合理性に対する根本的な問題提起

社会統合の原理がキリスト教から次第に分離し、キリスト教の地位が相対的に低下する。キリスト教会→国民国家、神学→哲学→科学

6. カント「啓蒙とは何か」(『啓蒙とは何か』岩波文庫)

「啓蒙とは、人間が自分の未成年状態から抜けでることである、ところでこの状態は、人間がみずから招いたものであるから、彼自身にその責めがある。未成年とは、他人の指導がなければ、自分自身の悟性を使用し得ない状態である」、「他人の指導がなくても自分自身の悟性を敢えて使用しようとする決意と勇気を欠く」、「それだから「敢えて賢かれ！(Sapere aude)」、「自分自身の悟性を使用する勇気をもて！」——これがすなわち啓蒙の標語である」(7)、「人間の根本的な考え方の真の革命」、「自分の理性をあらゆる点で公的に使用する自由」(10)、「啓蒙を進歩せしめることこそ、人間性の根源的本分だからである」(14)、「宗教上の事柄に関して何ひとつ国民に指図することなく、むしろこれらの事については彼等に完全な自由を与えることを義務と見なし、そのような言明を彼自身の尊厳にふさわしからぬものと認めないような君主」、「自由の精神」(17)、「啓蒙の重点を主として宗教に関する事柄に置いた」(18)

7. 啓蒙主義とは？ (ジャンタル・ムフ『政治的なるものの再興』千葉眞他訳、日本経済評論社)

・「啓蒙の抽象的普遍主義、社会的全体性に関する本質主義的構想、単一の主体の神話」「啓蒙の認識論的視座」「自己の基礎づけにかかわる啓蒙のプロジェクト」

・「万人の平等と自由とを成就していった近代の政治的プロジェクト」

Alister McGrath, *The Open Secret. A New Vision for Natural Theology*, Blackwell, 2008.

7. A Dead End? Enlightenment Approaches to Natural Theology. pp.140-170.

8. 啓蒙主義の思想的特徴：ティリッヒ『キリスト教思想史II』(別巻三、白水社)。

「神は世界を造ったが、今や世界は自己自身の法則に従う。神はもはや干渉しない。干渉はすべて計算可能性の喪失を意味する。このような干渉は受け容れがたいものであり、それゆえあらゆる特殊啓示は否定される必要がある」(68)、「地獄の恐怖も排除された」(69)、「恵みと同様、有限性、絶望、不安といった実存的要素も除かれた」、「残るものは、道徳的要素、しかも、ブルジョワ的な正義と安定という角度から見られた道徳である。靈魂不滅の信仰も残る。それは、死後も進歩改善を続ける人間の能力を意味していた。」(70)

↓

理神論

(2) 理神論＝啓蒙主義的宗教論 (17～18世紀、イギリスからフランス・ドイツへ)

国家や教派を越えた決定的な影響力

9. エドワード・ハーバード(Herbert, Edward 1581-1648、チャーベリーのハーバード)

ジョン・ロック(Locke, John 1632-1704)：経験論哲学、広教主義、宗教的寛容や政教分離、『キリスト教の合理性』(*The Reasonableness of Christianity*, 1695)

ジョン・トーランド(Toland, John 1670-1722)：『非神秘的なキリスト教』(*Christianity not mysterious*, 1695)

カント『単なる理性の限界内の宗教』(1793), *Innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft*
Emanuel Hirsch, *Geschichte der neueren evangelischen Theologie im Zusammenhang mit den allgemeinen Bewegungen des europäischen Denkens*.

10. 理神論、キリスト教の合理化の試み → キリスト教の解体・宗教批判から無神論へ。

11. 宗教本質論として：信仰とは、信仰命題を真理として受け入れること。知的営み。

ハーバード『真理について』(1624)：理性宗教(自然に備わった生得的なもの)

最も本質的な最高存在が存在する、最高存在への崇拜、敬虔な崇拜は美德であ

る、罪は悔い改めによって贖わなければならない、来世(因果応報的)の存在
 12. スピノザ(1632-77)『神学・政治論——聖書の批判と言論の自由 上下』岩波文庫。
 「前章に於て我々は、人間に真の幸福を与え・真の生活を教える神の法はすべての人間に普遍的であることを示した。のみならず我々はそれを人間の本性から導き出したので、それに依れば、神の法は人間の精神に生得的であり、いわば人間の精神に書き込まれていると考えてよいのである」(上172)

手島勲矢『ユダヤの聖書解釈——スピノザと歴史批判の転回』岩波書店。

↓

近代聖書学へ

13. F.L.Cross and E.A.Livingstone(eds.),

The Oxford Dictionary of the Christian Church. Third Edition, Oxford University Press, 1997.

Deism (from *Lat.* Deus, 'God'). The term, orig. interchangeable with Theism (q.v.), i.e. belief in one Supreme Being as opposed to atheism and polytheism, is now generally restricted to the system of natural religion which was first developed in England in the 17th and 18th cents. Among its precursors are P. Charron, J. Bodin (c.1530-96), and esp. Lord Hebert of Cherbury (q.v.), who in his *De Veritate* (1624) set out five truths common to all religions. J. Locke, though himself objecting to the title of 'Deist', also profoundly influenced subsequent developments through his *Reasonableness of Christianity* (1695). The classic exposition of Deism is John Toland's *Christianity not Mysterious* (1696), which argues against revelation and the supernatural altogether. S. Clarke, in his *Demonstration of the Being and Attributes of God* (1704-6), distinguished four classes of Deists. For the first, God is only the Creator, with no further interest in the world; the second group admit a Divine Providence, but only in the material, not in the moral and spiritual, order; the third believe in certain moral attributes of God, but not in a future life; and the fourth accept all the truths of natural religion, including belief in a life to come, but reject revelation. (465)

(3) 教養市民層の宗教

14. 啓蒙的近代の宗教状況。

ヒュームの自然宗教(人間の自然本性に基づく合理的宗教)論の描く世界

クレアンテス:理神論者、フィロ:懐疑論者、デメア:有神論者

15. 啓蒙主義の多様性:イギリス、フランス、ドイツ。→比較思想研究

16. 近代ドイツにおける宗教の分化:世俗化の一つの形

ルター派/カトリック

教養市民の宗教/農民の世界/都市労働者の世界

17. 「教養市民とは、十八世紀末ないし十九世紀はじめ以降のドイツで「教養」の理念を核として輪郭をととのえていった一つの身分を指し、具体的には、ギムナジウムと大学で新人文主義的教育を受けた、ごく少数のエリート層を意味する。」(野田、21)

「各時期にもっとも活力に富んでいた筈の新しい宗教運動ないしは思想運動が、いずれもいちはやく国王とその周辺の一とにぎりのエリート層の側に吸いとられ、民衆の側に既存エリートにたいする対抗文化を興隆させる拠りどころとはなりえなかった。いいかえれば、少数の支配層が次から次へと新しい宗教や思想を貪欲に摂取してその階層文化をゆたかにしたのにたいし、非エリート大衆の側は不活発で守旧的ルター派のカルチャーのなかにまどろみつづけたのだった。」(212)

イギリスのメソヂストとドイツの敬虔主義の違い。

↓

社会の安定化のために教会的宗教にも価値を見出しているが、自らの宗教性は、教養化し個人化してゆく(フランス啓蒙との相違)。

cf. 近代日本の教養主義

竹内 洋『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』
中公新書。

(5) 17世紀イギリスと千年王国論

18. 合理性の時代と終末論
19. 時代の共通精神としての終末論
 - ・ヨハネ黙示録解釈（近代聖書学の発端）
 - ・千年王国論、アンチキリスト
 - ・第五王国派の武装蜂起
 - ・霊的千年王国論
20. イギリスの社会システムをいかにソフトランディングさせるかという問題
絶対王政と表裏一体の国教会
穏健な国教会（広教主義）・穏健なピューリタン：ニュートン主義
ラディカルな反国教会主義・共和制：新しい科学に基づく唯物論
21. 知的巨人ニュートンの思想世界（「神の支配」による諸領域の統合、無神論を論駁するための科学）、ニュートンの聖書解釈（黙示文学解釈）と終末論
自然研究：数学・物理学（『プリンキピア』）／重力・光学／物質論、錬金術
歴史研究：聖書解釈／古代のキリスト教思想研究／古代年代記研究

<引用>

『黙示録』に傾注するルターの精神は、彼の後継者の間に「終末への強い待望論」が生まれる原動力となった。しかし、終わりの日へのこの強烈な待望は、教皇とアンチキリストを同一視する見方とともに、ルター派の信者だけでなく、一六世紀前半に現れ中世のキリスト教から脱却しようとした多くの改革者にも共通している。」（マッギン、270）

「独立派は、その内部の多様性にもまして、第五王国派と対比されなければなるまい。独立派が一六四〇年代における千年王国論の主要な担い手であるとすれば、第五王国派は五〇年代のそれである。」（岩井、118）

「英国市民戦争の革新的な急進派集団は、このような反体制的意図に基づいてアンチキリスト概念を多用したのであるが、彼らの言い回しは、前世紀のミュンツァーが率いたドイツ農民戦争のときの主張にも匹敵する。そのようなやり方と主張は「第五王国結社」を始め、市民戦争時代のほとんどの急進派に、はっきりと見られる。」（マッギン、288）

<参考文献>

1. 大津真作 『啓蒙主義の辺境への旅』世界思想社。
2. 安酸敏眞 『レッシングとドイツ啓蒙——レッシング宗教哲学の研究』創文社。
4. 加藤節『ジョン・ロックの思想世界——神と人間との間』東京大学出版会。
5. デイヴィッド・ヒューム『自然宗教に関する対話』法政大学出版会。
6. 野田宣雄『教養市民層からナチズムへ——比較宗教社会史のこころみ』名古屋大学出
7. 芦名定道・小原克博『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』世界思想社。
8. 岩井淳『千年王国を夢みた革命——17世紀英米のピューリタン』講談社。
9. バーナード・マッギン『アンチキリスト——悪に魅せられた人類の二千年史』
河出書房新社。
10. マーガレット・ジェイコブ 『ニュートン主義とイギリス革命』学術書房。
11. 大西晴樹『イギリス革命のセクト運動』御茶ノ水書房。